

4. 市場社会のイメージ

市場社会のプレーヤー

今回のキーワード

- ⊕ 市場
- ⊕ 自由・平等・私的所有
- ⊕ 私的労働
- ⊕ 私的生産

今回の課題

- ✓ 市場社会の独特な形成様式を明らかにする。
- ✓ どの人類社会でも共通な経済活動で明らかにされた概念が市場社会においてどのように実現され、またどのように実現されなかったのか。
 - ✓ 全体についてはグローバル性
 - ✓ 部分については個人の独立

今回の内容

1. 市場社会の構成部分としての商品交換
 - ▶ 商品交換とは？
 - ① 形式的自由
 - ② 形式的平等
 - ③ 私的所有
2. 全体としての市場社会
3. 商品交換の基盤である私的生産
 - ① 私的生産一般
 - ② 本来の私的生産

市場社会（はじめに）

- 市場社会としての現代社会
- 商品と貨幣がメインプレーヤー
- 社会的分業の高度な発達を前提
- 商品交換によって
 - グローバルな社会を形成
 - ⊕ それと同時に
 - 独立した私人を実現

1. 商品交換

市場社会の構成部分

1.0 商品交換とは？

商品価値

- 商品は市場価値を持つ。
- プレゼントではなく、等価のもの（＝価値の等しいもの）と引き換え
- 商品価値を決定するのは生産コスト

商品交換

- 社会的分業の実現
- 社会的労働の内部の一契機が、しかし労働とは別のものとして、労働の外部で実現されたもの。

自由・平等・私的所有

- 商品交換の原理
 1. 形式的自由
 2. 形式的平等
 3. 私的所有
- 市場社会の形成主体（人格）
 - = 自由・平等な私的所有者
 - 自己利得と自己責任
 - 前近代的共同体からの個人の自立

先取り：後で論じます

応用社会経済学2では…

- 交換の原理の中で、以下のものについては、応用社会経済学2で詳論する。
 - 私的所有とその形式性
 - 市場社会の形成主体（人格）
 - 市場社会のグローバル性とその形式性

1.1 形式的自由

交換過程の第一の契機

商品交換における自由の実現

1. 誰から命令されたのでもなく、ただ自分自身の自由意志でのみ、——
 2. 誰に命令するのでもなく、ただ相手の自由意志を通じてのみ、——
- = ただ互いの合意 (= 共通意志) を通じてのみ、——
- 交換関係を結ぶ = 社会形成する。

逆に、もし自由が不成立だと...

- 例えば奴隷は自由人ではない。
 - 特に商品交換の自由がない。
 - むしろ奴隷自身が商品として交換される。
- 奴隷主の所有物である奴隷が産出したオリーブは奴隷主の所有物である。
 - ↓ それゆえに
- 奴隷主は奴隷からオリーブを買わない。
 - ↓ すなわち
- 商品交換は成立しない。

この自由の形式性

- 実質的に (本当に) 自由なのかどうかは、市場の内部ではわからない。
- ひょっとすると会社の業務命令でその従業員が商品を買っているのかもしれない。
- しかし、そうだとすると、それは市場の外部での事情である。

1.2 形式的平等

交換過程の第二の契機

商品交換における平等の実現

- 利害の一致に基づいて、どちらが損をするのでもなく、上下の別ない対等なパートナーシップを形成する。
1. 価値的に見ると、どちらも損得していない。
 - ∴ 互いに等価物どうしを交換したから
 2. 使用価値的に見ると、どちらも満足している。
 - ∴ 互いに
不要なものを手放して、
必要なものを入手したから

逆に、もし平等が不成立だと...

- 例えば殿様と百姓とは平等ではない。
- 殿様は身分上、法的・政治的に百姓から一方的に年貢を徴収する権利を持っている。
 - ↓ それゆえに
- 殿様は百姓から米を買わない。
 - ↓ すなわち
- 商品交換は成立しない。

この平等の形式性

- 実質的に（本当に）平等なのかどうかは、市場の内部ではわからない。
- 例えば会社（法人）とその従業員（個人）とでは、経済力に根本的な不平等がある。
- しかし、そうだとすると、それは市場の外部での事情である。

1.3 私的所有

交換過程の第三の契機

私的所有と相互的承認

- お前のものはお前のもの、俺のものは俺のもの
- 一方では、相手の商品を、相手の排他的な所有物として承認する。
- 他方では、自分の商品を、自分の排他的な所有物として承認してもらう。
- それを通じて、両者は相互的に私的所有者として承認し合っている。

私的所有と商品交換

- だからこそ、合意を通じてしか、そして等価物の交換を通じてしか、所有権を移転することができない。
- 逆に言うと、商品交換が行われたということは、私的所有が成立したということの意味する。

逆に、もし私的所有が不成立だと...

- 例えば、もしビールを酒屋からマンビキしたら、私は、ビールを酒屋の私的所有物として承認しなかったことになる。
↓ ところが
- まさにマンビキは商品交換ではない。
↓ すなわち
- 商品交換は成立しない。

試験範囲外

私的所有の正当性

- なんてお前のもの？ なんて俺のもの？
- 所有という結果は労働という原因によって正当化するしかない。
- しかし、交換過程と労働過程とは切り離されている。
- ▶ 以上、政治経済学2で詳説

参考

試験範囲外

私的所有の形式性

- 実質的に（本当に）自己労働に基づいているのかどうかは、市場（＝交換過程）の内部ではわからない。
- ひょっとすると自己労働に基づかない取得（＝搾取）が行なわれているのかもしれない。
- しかし、そうだとすると、それは市場の外部での事情である。

参考

試験範囲外

労働の原理の形骸化

- ここ市場社会の考察では、自由・平等・所有は、労働そのものから切り離された交換で実現された。
- だから、それらの原理は労働そのものという、交換の内容においてどうなっているのかはわからず、形式的になっていた（形骸化していた）。

参考

試験範囲外

労働の原理の正反対化

- 資本主義的営利企業の内部では、交換は行わずに、労働そのものが行なわれる。
- 今後の資本主義社会の考察では、資本主義的営利企業の内部——では、それらの原理は形式的などころか、正反対になっているということが明らかになる。

参考

2. 市場社会

全体としての市場社会

市場社会とは？(1)

＝社会全体の経済活動が基本的に市場で行なわれているような社会
 〓 すなわち、社会的に生産されている富が基本的に市場で交換されているような社会
 ＝社会になった市場

先取り：後で論じます

注記

- ただし、このような意味での市場社会は、歴史的には、資本主義的な市場社会、すなわち資本主義社会においてはじめて実現された。
- 〓 すなわち、
- 資本主義的生産が行なわれない限りでは、市場は社会の一部分しか支配しなかった。
- 以上、『5. 資本主義社会のイメージ』で詳説

市場社会とは？(2)

=常に世界の至る所で行なわれ、
網の目のように広がっている
個別的な商品交換の総体

- 政治的社会 (例：日本国) のような実体 (領土・領海・領空, 国民, 国家) はない。
- 実体がないのだから、——
 - 空間的な制約がない, 地球規模の, グローバルな社会である。
 - 世界中で商品交換をやめると, 直ちに消滅する。

前近代的共同体のメインの 経済活動

- 前近代的共同体においては, 市場はあくまでも社会全体の物質代謝の補完部分だった。
- 社会全体の物質代謝の主要部分の中では個々の労働は直接的に社会的労働の一環をなしていた。

何故に交換をやめられないの？ (1)

- ∴商品生産関係が成立しているから
=社会的分業の中で
私的労働と社会的労働とが分離しているから
- 交換関係は生産関係の結果であり, 生産関係の一部である。
- とは言っても, 生産において形成されている社会的分業は, 交換において初めて実現される。
 - もし売れなかったら, 私的労働が社会的分業の一環をなしていなかったということ。

何故に交換をやめられないの？ (2)

- 前近代的共同体においては, 補完的市場で, たまたま余ったものを売り, どうしても入手できないのを買う, というのが基本だった。
- 現代市場社会においては, 単に余ったものを売りに出すのではなく, 社会的分業の中ですべての富がもともと市場向けに生産されている。
 - 市場から買わないと生産も消費もできない。
 - 市場に売らないと生産も消費もできない。

試験範囲外

市場社会のグローバル性

- 地縁・血縁に関わりない
グローバルな社会関係を, 実現する。
1. 労働過程から分離された交換過程で
 2. たった二者の交換関係の連鎖という形で
 - 単なる私利私欲の追求が結果的に共同利益を実現している。
 - 単なる二者の関係が結果的にグローバルな社会を実現している。

参考

試験範囲外

グローバル化の条件充足

- たがいに疎遠でバラバラな私的個人が交換過程で一方的に自分だけの私利私欲を追求したからこそ, 結果的にグローバルな社会が実現された。

参考

試験範囲外

グローバル化の形式性(1)

- 私的所有者同士の、分散された、互いに疎遠な関係という市場の原理から見ると――、
- 自覚的な社会形成（つまり交換）をなしているのは、ただ二者の関係だけである。

↑つまり

- 二者以上の関係は自覚的な社会形成から排除されている。

参考

試験範囲外

グローバル化の形式性(2)

- 部分としてのこの個別的交換において、自覚的に社会を形成しているという意識は当事者は持たない。
 - この自覚的な社会形成そのものの原理は無自覚性である。
- 全体としての市場社会そのものもまた自覚的に形成されたものではなく、個別的交換の寄せ集め、結果にすぎない。

参考

試験範囲外

グローバル化の形式性(3)

- 市場社会全体を実現しているのは社会的分業＝社会的労働である。

⇄しかし

- 個人が行っているのは全体（＝社会的総労働）から切り離された一部分（＝交換）に過ぎない。

参考

試験範囲外

グローバル化の形式性(4)

- 市場社会全体で実現されているのは共同利益である。

⇄しかし

- 個人が追求するのは、つまり個人の動機は、私利私欲のみである。
 - 交換という結果においては、そもそも労働において利益の共同性があったということさえ消えうせている。

参考

3. 私的生産

3.1 私的生産一般

現代社会の支配的・必然的な生産形態

市場社会の生産モデル

- 野菜農家の場合、
純粋モデルにおいては——
 - 自分が食べる野菜は？
 - 消費手段として市場で購入する。
 - 自分が蒔く種は？
 - 生産手段として市場で購入する。
 - 自分が生産した野菜は
 - すべて市場で販売する。

先取り：後で論じます

資本主義的な生産モデル(1)

- 市場社会の純粋な私的生産モデルもまた、
実は
資本主義的な私的生産モデルにおいて
初めて実現する。

例トヨタ自工の場合……

- 従業員や株主は原則として市場で自動車を買ひ、
- 自分が使う部品は市場で部品メーカーから買ひ、
- 自分が生産した自動車は（従業員や株主向けではなく）すべて市場で販売する。

先取り：後で論じます

資本主義的な生産モデル(2)

- それに加えて、
本来の私的生産モデルとは異なって、
資本主義的な私的生産モデルでは……
 - 労働力は市場で他人の労働力を購入する。
- やがては……
 - 貨幣は他人の貨幣を市場で
 - 借り入れたり（銀行借入・社債販売），
 - 自己資本に組込んだり（株式公開）する。
 - 土地（＝自然）は市場で他人の土地を借りる。

私的生産

- 私的個人が、
社会からも他人からも干渉を排除した
孤立的・排他的な空間で、
もっぱら自分だけの利益を追求し
（＝自己利益），
もっぱら自分だけで責任を負って
（＝自己責任），
自由に行う生産

私的生産の形態

1. 完全な自給自足
 - 前近代的共同体の中で生まれたが、
あまりに増えすぎると、
既存の共同体が崩壊してしまう。
2. 部分的に市場向けの生産
 - 余ったものだけを市場に売るとか
3. 完全に市場向けの生産
 - 原理的にすべての生産物を市場向けに生産する。
 - 市場社会の必然的な生産形態
 - 【以下では、これを考察する。】

私的個人

- 社会からも他人からもバラバラに
（＝孤立的・排他的に）自立した個人
- 歴史的には、前近代的共同体からの
自立を条件にする。

私的生産の構成要素

1. 私的労働

- 社会から隔絶された、排他的な労働
- 自給自足の場合にはこれで完結する。
- 市場社会の場合には、後に社会的労働にならなければならない。

2. 私的所有

- 私的労働に対応した排他的な所有形態
- 【政治経済学2で詳説】

私的生産一般のメリット

- 前近代の共同体から
 - 欲望の解放
 - 能力の解放
- コストの原理の徹底
 - コストが貨幣という形で一元化される。

私的労働と社会的労働との分離(1)

- 市場は社会的分業（社会的労働の分割）の体系である。
- 市場向け生産の場合には：
 - 私的労働は、それ自身で完結するのではなく、社会的労働にならなければならない。
 - ↓ つまり
 - 私的労働は、社会的分業の一環として実証されなければならない。
 - ↓ 要するに
 - 商品が売れなければならない。

私的労働と社会的労働との分離(2)

- 商品が売れて初めて、それを生産した私的労働が社会的労働であるということが実証される。
 - 全体としての市場の需給も事後的に調整される。
- 商品が売れなかったら：
 - その私的労働は私的労働でさえなく、ただの無駄骨だった。
 - 市場社会の形成主体になることもできなかった。
∴ 社会的分業の一環をなすことが市場社会の社会形成行為なのだから

3.2 本来の私的生産

いわゆる自営業の位置付け

本来の私的生産

- 前近代の共同体からの個人の切り離しと自立的主体化
 - 封建的組織に代わって個人の分散
 - 自己利得と自己責任の完結
 - 私的労働と個人的な私的所有
- このような市場の、《社会から孤立し、互いに孤立し合っているという意味で、個人主義的な原理》からすると、消費においてと同様に、生産においても、経済活動の主体としては私的個人——自然人としての自由・平等な私的所有者——こそが市場社会の原理にマッチしている。
∴ それ故に
- 本来の私的生産者は自営業者である。

本来の私的生産のインセンティブ

- 手段のインセンティブ
 - 誰の命令にも従わずに、自分の意志で自由に生産を行うということ（経済的目的達成のための手段）自体がインセンティブ
- 目的のインセンティブ
 - ポジティブなインセンティブ
 - その経済的利益がすべて自分のものになる。
 - ネガティブなインセンティブ
 - 逆に、失敗したら経済的利益を失う。

奴隷制との比較

	本来の私的生産	奴隷制
自分の労働力に対する所有	自分の意志で自由に働く	奴隷主の鞭が怖くて嫌々働く
生産物に対する所有	頑張れば、成果はすべて自分だけのもの	頑張っても、成果はすべて奴隷主のもの
生産手段に対する所有	自分のものだからこそ大切に扱う	生産手段を大切に扱わない

本来の私的生産のメリット

- 解放された欲望に基づき、自分の利益を自由に追求できる。
- 創意工夫して：
 - 自分の労働力を高め
 - 自分の生産方法を改革し
 - 自分の生産手段（特に労働手段）を改良する。
- 自分の労働力だけ、および自分のちっぽけな生産手段（特に土地）だけを使用するのだから、いくらでも自由に使えるとは言っても、逆にあまりにも無茶な使い方はしない。

本来の私的生産の限界(1)

- ↓ しかしまだ
1. 労働の社会的生産力を使わないという点で、生産力上昇に限界がある。
 - 多くの場合、資本主義的生産（＝資本主義的な私的生産）との競争（特に価格競争）には勝てない。

本来の私的生産の限界(2)

2. 賃金労働者を雇用せず、したがって人口の圧倒的大部分の生活を市場に依存させないという点で、前近代的共同体の解体に限界がある。
 - 市場を社会全体に拡げることができない。（市場社会を形成することができない）。

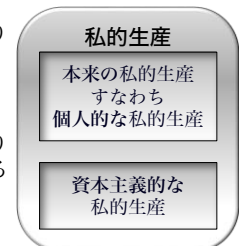
↓ すなわち

 - 自分（＝私的生産）を構成要素とするような社会システムを成立させることはできない。

先取り：後で論じます

本来の私的生産と資本主義的な私的生産

- このように、本来の私的生産は個人的な私的生産、つまり自営業者による生産形態である。
- しかしまだ、資本主義的な生産、つまり資本主義的営利企業による生産形態も私的生産の一種である。
 - ただし、本来の私的生産＝個人的な私的生産とは原理が異なる。



先取り：後で論じます

私的生産としての資本主義的生産

- 外部の社会関係を寄せ付けない、
この排他的な空間の
内部に社会関係を入れてしまうのが
資本主義的生産
 - 資本主義的生産の場合には、私的生産の内部で
数多くの従業員が協力しあって労働する。
 - しかし、この内部はプライバシーとして
外部からはブラックボックス化されている
(関係者以外立ち入り禁止!) から、
外部から見ると、
資本主義的生産は私的生産として現れる。

今回の結論

- ❖ 商品交換は
自由・平等な私的所有者を生み出す。
- ❖ 商品交換のネットワークの総体が
市場社会である。
- ❖ 市場社会において、
労働による個人・社会形成が初めて実現
された。しかし、それはまだ完全な実現
ではない。